

事業の概要

当社の事業は、ミニチュア・小径ボールベアリングやロッドエンド&スフェリカルベアリング及びピボットアッセンブリーを主要製品とする機械加工品セグメント(当期売上高比率40.7%)と、HDD用スピンドルモーターやファンモーター等の精密小型モーター、PC用キーボード、小型液晶用LEDバックライト等の光デバイス関連製品、及び計測機器を主要製品とする電子機器セグメント(同59.3%)により構成されています。

製品開発は、主に日本、ドイツ、タイ、米国で行っています。技術本部で中長期視野の基礎研究開発及び製品開発を、各事業部の技術開発部門ではビジネスに直結する製品開発を行い、各部門間の連携を通じ技術の補完と共有により、効果的な製品開発に努めています。生産はタイ、中国、シンガポール、マレーシア、日本、米国、英国で行っています。当社グループ最大の生産拠点であるタイの生産高が連結生産高に占める比率は当期48.4%であり、中国での生産高は22.8%、日本を除くアジア全体の生産高は80.8%、海外全体の生産高は91.0%です。

当社製品の主な市場は、PC及び周辺機器(当期売上高比率38.2%)、OA及び通信機器(同14.9%)、家電(同9.4%)、自動車(同9.6%)、航空宇宙(同9.4%)などです。これらのメーカーである当社の顧客は日米欧のほか中国を中心にアジアで生産を展開する企業が多く、当社の地域別売上高は日本を除くアジアが最も多く、連結売上高に占める比率は当期50.2%、次いで日本が多く25.0%、ほかは北米・南米と欧州となっています。

当社の組織は、機能的に活動できる体制を目的として14の事業部と5つの本部が社長直属の組織として構成されています。事業部は製造と営業が一体化した組織として担当事業の業績追求を行っています。また、本部は、各々の機能に応じて各事業部を横断的に側面から支援する組織です。

戦略の概要

当社は、精密部品の開発・生産・販売を事業領域として、「ものづくりで勝てる会社、技術で勝てる会社」を標榜し、発展と成長を目指しています。その実現のためには、収益力を向上させ、これをスピードを上げて果たすことが現在の当社の最大課題であると考え、1. 構造改革の断行、2. 技術開発の強化、3. 将来像を明確にした経営を当面の経営戦略課題として掲げ、取り組んでいます。

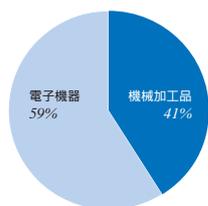
この目標のもと、当期は、1. 組織改革～事業部制の導入、本部の設置、2. 量から質へ、売上から利益追求への方針転換、3. 技術開発の強化～技術本部による統括、基礎技術部門の設置、4. 課題事業への対応を実施しました。組織改革により組織間の壁の排除とグループ内資源の有効活用が進み、各組織がベクトルを合わせて事業を展開しています。また、量より利益を優先する方針を明確にし、ものづくりへの取り組みを見直し徹底させることにしました。技術開発については、技術本部の下基盤が再構築されつつあります。新製品や新市場、及び次世代製品の開発に大切なのはコア技術の開発であることから、基礎技術の強化に重点を置き、複数のコア技術を複合化することで新しいビジネスの展開をはかっています。収益面で課題を抱えている事業については、早期の利益化を目指し最優先事項として対応しています。

当期中は課題事業の損失縮小と成長事業の基盤再構築に注力しましたが、来期は課題事業の黒字化と成長事業の拡大に向けて体制を整備します。製造の原点への回帰を徹底させ、製造技術の強化、技術開発の強化に力点を置き、新製品の開発及び新市場への展開をはかります。これらにより、再来期以降の当社の成長と発展につなげて参ります。

セグメント別財務データ

	単位：百万円				
3月31日に終了した各会計年度	2006	2005	2004	2003	2002
事業の種類別外部顧客に対する売上高：					
機械加工品	¥ 129,595	¥ 116,105	¥ 111,693	¥118,118	¥ 122,025
電子機器	188,851	178,317	156,881	154,084	156,303
流通販売ほか	—	—	—	—	1,016
計	¥ 318,446	¥ 294,422	¥ 268,574	¥272,202	¥ 279,344
事業の種類別営業利益(損失)：					
機械加工品	¥ 24,556	¥ 21,572	¥ 19,505	¥ 18,520	¥ 22,135
電子機器	(5,287)	(7,489)	(1,401)	832	(163)
流通販売ほか	—	—	—	—	(0)
計	¥ 19,269	¥ 14,083	¥ 18,104	¥ 19,352	¥ 21,972
事業の種類別資産：					
機械加工品	¥ 205,437	¥ 194,180	¥ 189,741	¥191,793	¥ 205,920
電子機器	218,790	214,142	196,918	204,489	231,806
流通販売ほか	—	—	—	—	745
消去又は全社	(74,365)	(76,105)	(71,744)	(76,213)	(88,434)
計	¥ 349,862	¥ 332,217	¥ 314,915	¥320,069	¥ 350,037
事業の種類別減価償却費：					
機械加工品	¥ 11,437	¥ 10,401	¥ 10,811	¥ 10,378	¥ 9,489
電子機器	12,535	12,061	10,894	12,448	14,891
流通販売ほか	—	—	—	—	5
計	¥ 23,972	¥ 22,462	¥ 21,705	¥ 22,826	¥ 24,385
事業の種類別減損損失：					
機械加工品	¥ 388	¥ —	¥ —	¥ —	¥ —
電子機器	579	—	—	—	—
流通販売ほか	—	—	—	—	—
計	¥ 967	¥ —	¥ —	¥ —	¥ —
事業の種類別資本的支出：					
機械加工品	¥ 12,279	¥ 11,400	¥ 4,168	¥ 4,750	¥ 7,963
電子機器	9,929	22,757	14,929	11,853	18,485
流通販売ほか	—	—	—	—	5
計	¥ 22,208	¥ 34,157	¥ 19,097	¥ 16,603	¥ 26,453
所在地別外部顧客に対する売上高：					
日本	¥ 77,856	¥ 76,660	¥ 68,760	¥ 72,755	¥ 83,705
アジア(日本を除く)	155,423	137,424	121,072	107,789	95,884
北米・南米	59,468	52,390	48,726	58,998	63,569
欧州	25,699	27,948	30,016	32,660	36,186
計	¥ 318,446	¥ 294,422	¥ 268,574	¥272,202	¥ 279,344
所在地別営業利益：					
日本	¥ 1,922	¥ 2,752	¥ 4,883	¥ 3,133	¥ 767
アジア(日本を除く)	12,843	5,870	10,763	12,418	17,387
北米・南米	2,888	4,510	2,084	1,859	1,968
欧州	1,616	951	374	1,942	1,850
計	¥ 19,269	¥ 14,083	¥ 18,104	¥ 19,352	¥ 21,972
所在地別資産：					
日本	¥ 161,968	¥ 169,239	¥ 166,277	¥175,917	¥ 195,305
アジア(日本を除く)	247,186	223,995	201,194	185,397	201,541
北米・南米	36,864	32,442	29,173	37,064	38,088
欧州	19,618	20,300	20,075	20,528	25,194
消去又は全社	(115,774)	(113,759)	(101,804)	(98,837)	(110,091)
計	¥ 349,862	¥ 332,217	¥ 314,915	¥320,069	¥ 350,037

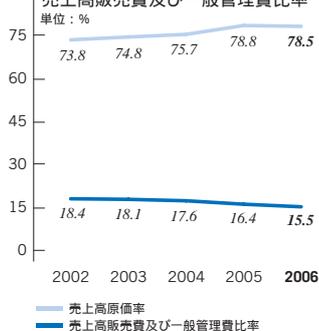
事業の種類別売上高構成比



事業の種類別売上高



売上高原価率
売上高販売費及び一般管理費比率



売上高

当期の売上高は318,446百万円と、前期比24,024百万円(8.2%)の増加となりました。当期も世界的な経済の拡大傾向が続きました。当社が事業を展開する業界においても需要の拡大が続き、なかでもBRICsやアジア諸国を中心に、PCなどの情報通信機器や携帯電話の普及、薄型テレビやDVDレコーダー等のデジタル家電の市場拡大、デジタル携帯音楽端末の市場拡大が世界的に見られました。さらには、航空機市場の回復と自動車市場の好調が続きました。このような事業環境のなか、販売単価が比較的安定して推移したことに加え、新製品の市場投入と拡販やコスト削減に努めた結果、売上高は前期に比較して増加しました。なお、円安による売上高への増加の影響は合計約119億円でした。

売上原価

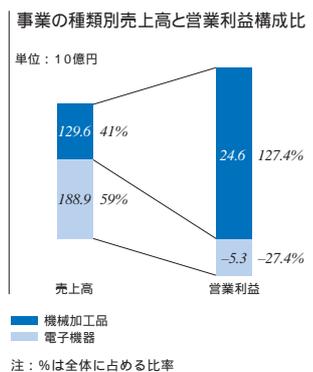
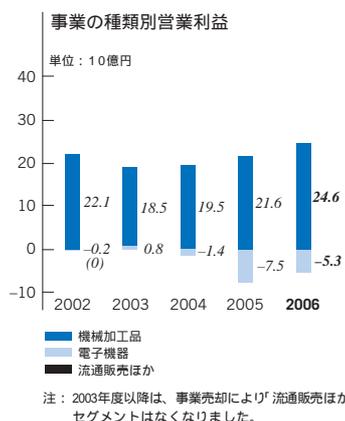
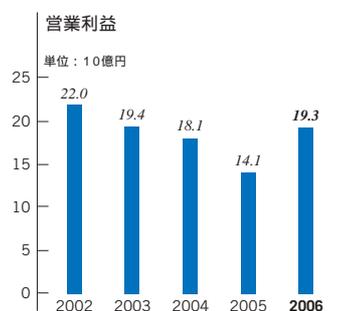
当期の売上原価は249,935百万円と、前期比17,916百万円(7.7%)増加しました。売上高に対する比率は前期から0.3ポイント低下して78.5%となりました。売上原価に対する円安の影響は約99億円の増加でした。鋼材等の原材料価格の上昇によるマイナス影響がありましたが、生産効率の改善が進み、原価率が改善しました。

販売費及び一般管理費

当期の販売費及び一般管理費は49,242百万円と、前期比922百万円(1.9%)増加しました。売上高に対する比率は前期から0.9ポイント低下して15.5%となりました。物流費、販売活動費、経費などの削減を推進した効果が表れましたが、円安による海外子会社の費用の増加が約13億円ありました。

売上原価、販売費及び一般管理費

3月31日に終了した各会計年度	単位：百万円				
	2006	2005	2004	2003	2002
売上高	¥318,446	¥294,422	¥268,574	¥272,202	¥279,344
売上原価	249,935	232,019	203,261	203,500	206,061
売上高原価率	78.5%	78.8%	75.7%	74.8%	73.8%
売上総利益	68,511	62,403	65,313	68,702	73,283
販売費及び一般管理費	49,242	48,320	47,209	49,350	51,311
売上高販売費及び一般管理費比率	15.5%	16.4%	17.6%	18.1%	18.4%



営業利益

当期の営業利益は19,269百万円と、前期比5,186百万円(36.8%)増加し、売上高営業利益率は6.0%と、前期から1.2ポイント上昇しました。なお、円安による営業利益への増加の影響は約7億円でした。

その他収益・費用

その他収益・費用(営業外損益及び特別損益の純額)は9,649百万円の費用・損失となり、前期から3,344百万円費用・損失が拡大しました。当期はキーボード事業で高付加価値モデルに特化する体制への切り替えを柱とした構造改革の実施を決定し、事業構造改革損失として3,475百万円を計上しました。また、土地及び建物の遊休固定資産の減損損失として967百万円を計上しました。支払利息は海外における金利上昇の影響により、4,771百万円と前期比1,410百万円増加しました。

税金等調整前当期純利益

以上の結果、税金等調整前当期純利益は9,620百万円と、前期比1,842百万円(23.7%)増加しました。

法人税等

当期の法人税、住民税及び事業税として5,567百万円、法人税等調整額として1,574百万円を計上したため、法人税等合計は7,141百万円となり、前期から1,628百万円の増加となりました。赤字子会社があることと、海外子会社からの受取配当金に対して外国税額控除が適用されないことが、税率が高い理由です。

少数株主利益(損失)

当期の少数株主損失は1,778百万円の損失となり、前期から1,538百万円の損失減少となりました。ミネベア・松下モータ合弁事業の損益が改善したことなどによります。

当期純利益

以上の結果、当期純利益は前期比1,324百万円減少し、4,257百万円となりました。1株当たり当期純利益は10.67円と、前期の13.93円から減少しました。

利益

3月31日に終了した各会計年度	単位:百万円				
	2006	2005	2004	2003	2002
営業利益	¥19,269	¥14,083	¥18,104	¥19,352	¥21,972
売上高営業利益率	6.0%	4.8%	6.7%	7.1%	7.9%
その他収益・費用 (営業外損益及び特別損益の純額)	(9,649)	(6,305)	(5,146)	(18,857)	(9,023)
当期純利益(損失)	4,257	5,581	6,019	(2,434)	5,298
売上高当期純利益(損失)率	1.3%	1.9%	2.2%	(0.9)%	1.9%
1株当たり当期純利益(損失)(円):					
潜在株式調整前	10.67	13.93	15.08	(6.10)	13.27
潜在株式調整後	—	13.27	14.51	(4.85)	12.60
株主資本当期純利益(損失)率	3.9%	5.7%	6.3%	(2.3)%	5.0%
総資産当期純利益(損失)率	1.2%	1.7%	1.9%	(0.8)%	1.5%

財務方針と流動性の確保

当社グループが展開するさまざまな事業分野では、製品開発や技術開発のスピードが加速し、グローバルに企業間の競争が激化しています。このような環境のもとでは、顧客のあらゆる要求に応える新製品の開発、市場を一步リードする製品の開発のための先行投資、需要の増減に直ちに対応できる設備投資等、実行の柔軟性の確保が不可欠です。これらのダイナミックな企業行動と「技術開発力の強化」の推進を支えるために、当社グループでは財務の健全性と資金調達の機動性の維持・強化に努めています。

当社の格付は以下のとおりですが、財務体質の一層の強化をはかることを目的に、ネットD/Eレシオを1倍(当期末現在1.2倍)とし、ネット有利子負債を、1,000億円を下回る水準(当期末現在146,887百万円)に削減する中期的な目標を設けています。不透明な金利情勢による金利負担増加の回避をはかること、また、これらの中期的目標の速やかな実現に向けて、利益の拡大、在庫圧縮や効果的な投資計画による資産の効率活用の徹底により有利子負債削減のペースを加速させて参ります。設備投資につきましては、成長事業では積極的な拡大投資を行う一方で、収益改善が課題となっている事業では徹底的な合理化を進め、効率的な投資の実施に努めています。

また、当社では、機動的な資金調達のために、500億円の普通社債発行登録を行うとともに、格付機関より100億円を発行枠とする短期社債の格付を受けています。さらに資金調達基盤の安定性の維持・強化を目的として、内外の金融機関との良好な関係を維持するほか、コミットメントライン契約を締結するなど、流動性に関するリスクマネジメントには万全の体制を構築しています。

当社格付

2006年6月現在	長期格付	短期格付
ムーディーズ・インベスターズ・サービス(Moody's)	Baa2	—
日本格付研究所(JCR)	A	J-1
格付投資情報センター(R&I)	BBB+	a-2

設備投資

当期の有形固定資産の取得(設備投資額)は前期比1,163百万円減少し、21,897百万円となりました。既存設備の更新と金型への投資のほかは、ピボットアッセンブリー、ロッドエンド&スフェリカルベアリング、ライティングデバイスの増産投資が主たる分野でした。来期は、当期とほぼ同様の210億円を予定しています。ボールベアリングの更新及び合理化、ロッドエンド&スフェリカルベアリング、ピボットアッセンブリー、HDDスピンドルモーターの各増産、その他各設備の合理化と金型への投資に充当の予定です。

配当金

経営環境の変化に機敏に対応できる体制の構築を目指して、財務体質の強化と内部留保資金の充実をはかりつつ、安定した配当を継続することが重要であると考えています。当期の配当金につきましては、前期に引き続き1株7円としました。来期も同水準を予定しています。

フリー・キャッシュ・フロー

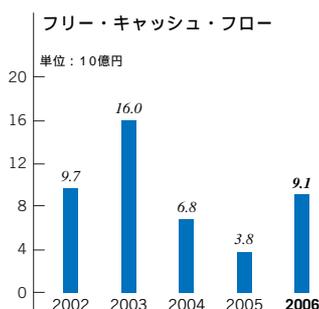
当期のフリー・キャッシュ・フロー(営業活動によるキャッシュ・フローに投資活動によるキャッシュ・フローを合算した額)は、前期比5,320百万円(140.1%)増加し9,117百万円となりました。

営業活動によるキャッシュ・フロー

営業活動によるキャッシュ・フローは28,237百万円の収入と、前期比651百万円(2.4%)収入が増加しました。税金等調整前当期純利益が9,620百万円と、1,842百万円増加したこと及びたな卸資産の減少2,082百万円(前期比3,679百万円の収入増)が主な増加要因です。減価償却費は前期比1,510百万円増加し、23,972百万円でした。

投資活動によるキャッシュ・フロー

投資活動によるキャッシュ・フローは前期比4,669百万円(19.6%)支出が減少し、19,120百万円の支出となりました。主に有形固定資産の取得による支出21,897百万円(前期比1,163百万円の減少)がありました。

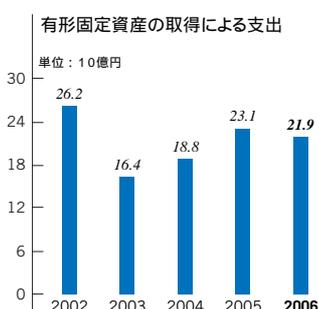


財務活動によるキャッシュ・フロー

財務活動によるキャッシュ・フローは、前期比1,392百万円(15.9%)支出が減少し、7,380百万円の支出となりました。借入債務の減少額4,567百万円(前期比1,342百万円の支出の減少)と、配当金の支払額2,793百万円(前期比横ばい)が主な支出でした。

現金及び現金同等物

フリー・キャッシュ・フローが財務活動によるキャッシュ・フローを上回ったことにより、当期の現金及び現金同等物の期末残高は、前期比2,626百万円増加し24,385百万円となりました。

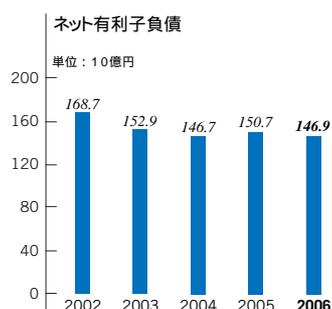


フリー・キャッシュ・フロー

	単位：百万円				
3月31日に終了した各会計年度	2006	2005	2004	2003	2002
営業活動によるキャッシュ・フロー	¥ 28,237	¥ 27,586	¥ 21,714	¥ 32,279	¥ 34,017
投資活動によるキャッシュ・フロー	(19,120)	(23,789)	(14,932)	(16,233)	(24,346)
うち有形固定資産の取得による支出	(21,897)	(23,060)	(18,825)	(16,382)	(26,245)
フリー・キャッシュ・フロー	9,117	3,797	6,782	16,046	9,671

注：2005年度より、フリー・キャッシュ・フローを営業活動によるキャッシュ・フローに投資活動によるキャッシュ・フローを合計し算出しております。また、過年度の数値を修正し再表示しております。

資産、負債及び資本

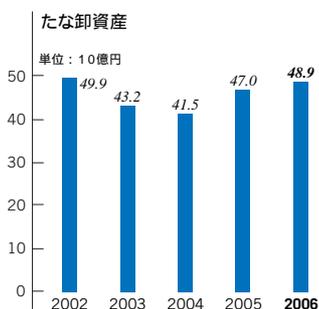


当期末現在の資産合計は、前期末比17,645百万円(5.3%)増加の349,862百万円となりました。前期末より円安になったことによる資産増加の影響が約250億円ありました。資本合計は前期末比15,489百万円(15.2%)増加の117,577百万円となりました。借入債務合計額から現金及び現金同等物を差し引いたネット有利子負債は、前期末比3,807百万円(2.5%)減少の146,887百万円となり、その結果、ネットD/Eレシオは前期末から改善し1.2倍となりました。また、株主資本比率は前期末比2.9ポイント上昇し33.6%となりました。

資産

現金及び現金同等物は、主にキャッシュ・フローの収入により、前期末比2,626百万円増加し24,385百万円となりました。受取手形及び売掛金は円安による増加の影響が約36億円あり、前期末比2,600百万円増加し68,997百万円となりました。たな卸資産は、ボールベアリングや情報モーターなどの仕掛品及び完成品を削減しましたが、円安による増加の影響が約40億円あり、前期末比1,951百万円増加し48,914百万円となりました。繰延税金資産は3,402百万円と、1,722百万円減少しました。これらの結果、流動資産合計は前期末比6,269百万円(4.3%)増加し153,564百万円となりました。

有形固定資産は、前期末比9,238百万円(5.9%)増加し165,759百万円となりました。当期の有形固定資産の取得(設備投資額)は21,897百万円となり、減価償却費は23,972百万円でした。また、土地や建物の遊休資産の減損が967百万円ありましたが、円安の影響による増加要因が約142億円ありました。



無形固定資産は、主に連結調整勘定の償却により前期末比936百万円(6.6%)減少し13,177百万円となりました。

投資その他の資産は、繰延税金資産が減少しましたが、保有株式の含み益の増加による投資有価証券の増加により、前期末比3,105百万円(21.9%)増加し17,280百万円となりました。

繰延資産は前期末比31百万円減少し82百万円となりました。

負債

支払手形及び買掛金は、円安による増加の影響が約20億円あり、前期末比1,309百万円増加し36,609百万円となりました。短期借入債務は前期末比600百万円減少し80,656百万円となりました。1年以内に返済予定の長期借入債務は、主に返済予定の長期借入金が増加したことにより、前期末比5,260百万円増加し11,116百万円となりました。このほかにキーボード事業構造改革費用の引当金を3,286百万円計上したこともあり、流動負債合計は前期末比9,437百万円(6.7%)増加し150,886百万円となりました。

長期借入債務は、1年以内に返済予定の長期借入金が増加したことにより、前期末比5,841百万円(6.8%)減少し79,500百万円となりました。その結果、固定負債合計は前期末比5,378百万円(6.2%)減少し80,767百万円となりました。

少数株主持分

少数株主持分は、前期末比1,903百万円(75.1%)減少し632百万円となりました。主にミネベア・松下モータ合弁事業の損失計上によるものです。なお、中国でのキーボード合弁事業は2006年3月に合弁を解消し、同事業関連会社は当社の100%子会社となりました。

資本

当期末現在の資本合計は、前期末比15,489百万円(15.2%)増加し117,577百万円となりました。主な内訳は、利益剰余金の増加1,464百万円、その他有価証券評価差額金の増加2,853百万円、為替換算調整勘定の減少11,182百万円となります。

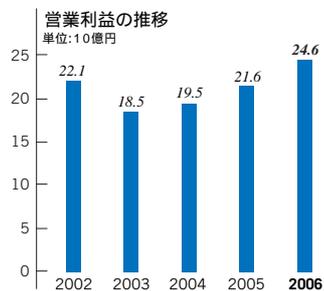
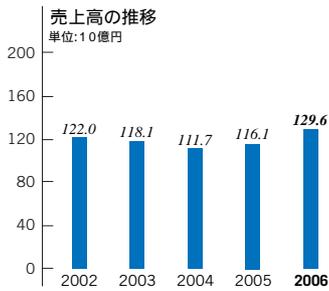
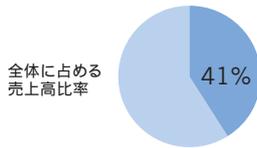
資産、負債及び資本

3月31日現在	単位：百万円				
	2006	2005	2004	2003	2002
総資産	¥349,862	¥332,217	¥314,915	¥320,069	¥350,037
現金及び現金同等物	24,385	21,759	24,780	14,177	13,952
流動資産	153,564	147,295	138,953	127,447	131,548
たな卸資産	48,914	46,963	41,534	43,204	49,887
流動負債	150,886	141,449	167,626	134,459	156,908
運転資本	2,678	5,846	(28,673)	(7,012)	(25,360)
有利子負債	171,272	172,453	171,485	167,125	182,673
ネット有利子負債	146,887	150,694	146,706	152,947	168,720
株主資本	117,577	102,088	93,866	98,213	112,732
株主資本比率	33.6%	30.7%	29.8%	30.7%	32.2%
D/Eレシオ	1.5倍	1.7倍	1.8倍	1.7倍	1.6倍
ネットD/Eレシオ	1.2倍	1.5倍	1.6倍	1.6倍	1.5倍
1株当たり株主資本(円)	294.65	255.82	235.21	246.08	282.42

セグメント情報

事業の種類別業績

機械加工品事業



主要製品

ベアリング及びベアリング関連製品
 ミニチュア・ボールベアリング
 小径ボールベアリング
 シャフト一体型ボールベアリング
 ロッドエンドベアリング
 スフェリカルベアリング
 ローラーベアリング
 スリプベアリング
 ピボットアッセンブリー
 テープガイド

その他機械加工品
 航空機用・自動車用ネジ類
 特殊機器
 電磁クラッチ / 電磁ブレーキ

機械加工品事業の売上高は129,595百万円と、前期比13,490百万円(11.6%)の増加となりました。営業利益は24,556百万円と、前期比2,984百万円(13.8%)の増加となり、売上高営業利益率(売上高は外部顧客に対する売上高)は18.9%と、前期より0.3ポイント上昇しました。好調な需要環境を背景に主要製品の販売が伸長し、販売単価が安定して推移しました。主力のミニチュア・小径ボールベアリング事業は、情報通信機器や自動車向けに販売が増加し、高水準の売上と利益が続きました。ピボットアッセンブリーはPCやデジタル家電等に需要が拡大しているHDD向けに売上高が大きく増加し、販売価格の是正も実施しました。加えて、生産効率向上施策の成果により、利益が大幅に改善しました。ロッドエンド&スフェリカルベアリングも主要市場である航空機業界からの需要が旺盛で、売上高と利益が増加しました。

主要製品群、市場、市場での位置付け

製品群と主要製品	主要市場	当社の世界市場占有率(注)
ベアリング及びベアリング関連製品		
ミニチュア・小径ボールベアリング	各種小型モーター、家電、情報通信機器、自動車、産業機械	60%
ロッドエンド&スフェリカルベアリング	航空機	50%
ピボットアッセンブリー	HDD	70%
その他機械加工品		
特殊機器、ネジ	航空機、自動車、産業機械	

注：市場占有率は数量ベース。ロッドエンド&スフェリカルベアリングのみ金額ベース。当社で独自に入手した情報及び市場調査会社の情報を基に、当社が対象とする市場における占有率を推定。

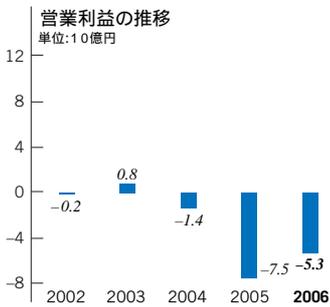
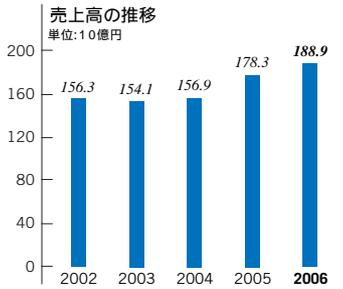
事業詳細

ボールベアリング事業では、ピボットアッセンブリーやデジタル製品向けの需要拡大に伴うミニチュアサイズの市場の広がりに対応し、増産を実施しています。歩留まり向上と合理化による原価低減を継続して行っています。また、製造の原点への回帰をテーマとして事業の強化をはかりながら、基礎技術開発部門を設置して技術開発の強化もはかっています。

ロッドエンド&スフェリカルベアリング事業では、年率2桁増が続く航空機需要に対応し、軽井沢、米国、英国の3拠点で生産能力の増強を実施すると同時に、低コスト体制の構築と生産能力の増強を目的として、タイの前工程生産の活用をさらに進めています。顧客の新機種開発に併せて、製品開発にも注力しています。

ピボットアッセンブリー事業では、今後も年率2桁増が続くと予想されるHDD市場で70%のシェアを維持することを方針としています。生産能力の増強と、部品内製化、歩留まり向上、及び設計標準化による継続的な原価低減をはかっています。

電子機器事業



電子機器事業の売上高は188,851百万円と、前期比10,534百万円(5.9%)の増加となりました。営業損失は5,287百万円と、前期比2,202百万円の改善となり、売上高営業利益率(売上高は外部顧客に対する売上高)はマイナス2.8%と前期より1.4ポイント改善しました。一部の事業で量より利益を追求する方針へ切り替えた影響がありましたが、好調な事業環境に加え、円安による増加要因もあり、売上高は増加しました。なかでも液晶用LEDバックライトを中心とするライティングデバイス事業では、携帯電話市場の拡大と当社製品採用機種数の増加により、売上高が大きく伸び、利益が増加しました。HDD用スピンドルモーター事業では、2005年7月以降の生産販売数量を一定に維持し原価低減に集中する方針への切り替えの影響により売上高は微増となりましたが、新たな生産効率向上の取り組みのもと、関連組織の連携強化と各製造工程において生産効率向上に努めた結果、下期の損失はゼロになるまで回復しました。情報モーター事業では製造拠点の再編を中心とする事業構造改革の成果により改善が進みました。

主要製品群、市場、市場での位置付け

製品群と主要製品	主要市場	当社の世界市場占有率(注)
回転機器		
HDD用スピンドルモーター	HDD	15%
情報モーター (ファンモーター、ステッピングモーター、 ブラシ付DCモーター、震動モーター)	PC・サーバー、情報通信機器、 家電、携帯電話、自動車、 産業機械	製品により 5~20%
その他電子機器		
PC用キーボード	PC	15%
液晶用LEDバックライト	携帯電話、デジタルカメラ デジタル携帯端末	10%
スピーカー	オーディオ機器、PC、自動車	
計測機器	産業機械	

注：市場占有率は数量ベース。当社で独自に入手した情報及び市場調査会社の情報を基に、当社が対象とする市場における占有率を推定。

主要製品

回転機器

ハードディスクドライブ(HDD)用
スピンドルモーター
ファンモーター
ハイブリッド型ステッピングモーター
PMステッピングモーター
ブラシ付DCモーター
振動モーター
VRレゾルバ

その他電子機器

パソコン(PC)用キーボード
スピーカー

エレクトロデバイス製品

カラーホイール、光磁気ディスク
ドライブ(MOD)、液晶用ライティング
デバイス、フロッピーディスク
ドライブ(FDD)用磁気ヘッド、バック
ライトインバーター

計測機器

ひずみゲージ、ロードセル

事業詳細

HDD用スピンドルモーター事業では、当期、組立と部品、並びに製造と営業の組織連携の強化をはかり、また、外注部品の内製化、部品歩留まり向上、組立工程での作業改善を中心とした原価低減を実施したことにより損益改善を実現しました。来期は、さらなる原価低減により利益体質の定着を目指すとともに、2.5インチFDBモーターの生産・販売の引き上げに注力します。新製品開発も引き続き進めています。

情報モーター事業では、事業構造の見直しを実施しています。製造拠点の統廃合、外注活用の見直し、製造の効率改善を柱とした生産体制の整備によりコストの引き下げをはかっています。また、受注内容の精査、新製品開発の効率化により製品構成の改善も実施し、来期中の利益化を目指しています。

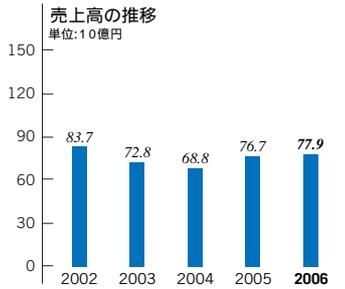
キーボード事業では、高付加価値モデルに事業資源を集中する体制への転換を当期末に決定しました。来期末までに当社の技術力と製造力を活用できる体制を構築し、収益の改善を強力に進めます。製造、営業及び技術の組織再編、設備の除却などにより固定費を削減するのに伴い、当期は事業構造改革損失3,475百万円をその他費用として計上しました。

光デバイス関連事業では、2005年10月に発表した高輝度・超薄型LEDバックライトの拡販をさらに推進します。より高精細な液晶性能が求められるなか、ワンセグ対応携帯電話端末での採用件数はトップとなっています。車載向け中型LEDバックライトの積極的な受注活動も展開しています。また、液晶TV用インバーターの売上を拡大し、低価格対応新製品の製品化を目指しています。

所在地別業績

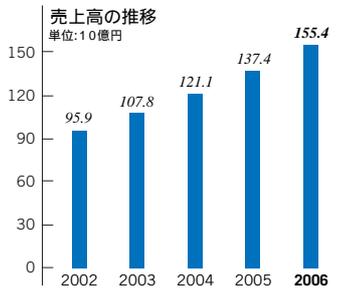
日本

日本地域は、売上高77,856百万円と、前期に比べ1,196百万円(1.6%)の増収となりましたが、営業利益は、1,922百万円と830百万円(30.2%)の減益となりました。



アジア(日本を除く)

アジア地域は、旺盛な投資等により高成長を続けている中華圏を含み、多くの日本、欧米等のメーカーの生産拠点として重要な地域です。売上は、情報通信機器関連業界の需要拡大や堅調な家電業界の需要に支えられ、中華圏を中心に堅調に推移しました。利益面では、ピボットアッセンブリー等のメカニカルパーツの値上げ及びコスト削減、HDD用スピンドルモーターのコスト削減対策等により収益改善効果が表れてきています。この結果、売上高は155,423百万円と前期に比べ17,999百万円(13.1%)の増収となり、営業利益は12,843百万円と6,973百万円(118.8%)の増益となりました。



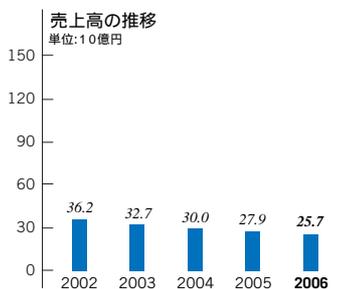
北米・南米

北米地域は、情報通信機器関連顧客のアジアへの生産移管が進んだものの、キーボードその他の電子機器部品は堅調に推移しました。また、米国生産のボールベアリング及び航空機関連業界等向けのロッドエンドベアリングは、受注・販売共に好調に推移しました。この結果、売上高は59,468百万円と前期に比べ7,078百万円(13.5%)の増収となりましたが、営業利益は2,888百万円と一部製品の輸入仕入価格変更もあり1,622百万円(36.0%)の減益となりました。



欧州

欧州地域は、緩やかな経済成長のなかで、ボールベアリング及びロッドエンドベアリング等が堅調に推移しましたが、米国系顧客向けキーボードビジネスを北米地域へ移管したため、売上高は25,699百万円と、前期に比べ2,249百万円(8.0%)の減収となりましたが、営業利益は1,616百万円と、665百万円(70.0%)の増益となりました。



(注)売上高：外部顧客に対する売上高

当社グループは、各種ボールベアリング及びその応用部品に代表される精密機械部品、ロッドエンドベアリング、高級ファスナーをはじめとする航空機部品、また最先端の電子機器に使用される各種電子部品等の製造及び販売を行っており、それぞれの分野での研究開発は、当社及び世界に展開するグループ各社の技術部門間で相互に密接な連絡をとり効果的に進められております。

また、当社グループは軽井沢工場、浜松工場のほか、タイ、シンガポール、中国、米国及び欧州の各拠点にR&Dセンターを有しております。

当連結会計年度におけるグループ全体の研究開発費は9,048百万円であり、この中にはタイ、シンガポール及び中国のR&Dセンターで行っている各種材料の基礎的な解析等、事業別に配分できない基礎研究費212百万円が含まれております。

当連結会計年度における事業の種類別セグメントの研究開発活動は、次のとおりです。

機械加工品事業

機械加工品事業の主力である各種ベアリングについては、製品開発に加えて、事業のさらなる競争力強化と継続的な拡大を目的として、中・長期的な視野で基礎技術開発を横断的に遂行するためのベアリング基礎技術開発部門を技術本部に新設しました。各種ベアリングのうち、複写機やプリンター等の情報機器に使用されるボールベアリングについては、当社の従来品に比べて寿命が4倍となる導電性グリースを開発いたしました。また、環境保護対策が重視され、高効率・低消費電力が常に要求される家電製品に使用されるボールベアリングについては、より小さいちょう度のグリース及び超精密加工技術によって当社の従来品に比べてより低いトルクで回転可能なベアリングを開発いたしました。航空機産業向けベアリングについては、欧州航空機メーカーの主要旅客機の主翼スラットに採用されている低トルクレバーピニオンベアリングの開発を完了したほか、米国航空機メーカーの次期旅客機での採用に向けて、ローラーベアリングの開発を行っております。

2006年3月に、タイR&Dセンターが、鉛、カドミウム、水銀、6価クロム等の有害物質の化学分析業務に関してタイ国産業省標準局の国家認定を受けました。2006年6月には、上海R&Dセンターが、同様の分析業務に関して中国政府の国家認定を受けました。これらの国家認定を受けることによって、信頼性がより高い分析データをお客様に提供できるとともに、当社グループの主要生産拠点での環境に悪影響を及ぼす物質及び製品安全の管理体制が強化されることとなります。

当事業にかかる研究開発費は1,828百万円です。

電子機器事業

電子機器事業の主力である回転機器については、ファンモーター、ステッピングモーター、PMステッピングモーター、HDD用スピンドルモーター等のモーターの製品開発に加えて、高付加価値回転機器の開発と高収益事業の継続を目的として、中・長期的な視野で基礎技術開発を横断的に遂行するための回転機器基礎技術開発部門を技術本部に新設しました。また、従来からの特殊モーターの制御技術を向上させて、高効率化を実現する研究を行う一方で、その応用製品としてVRレゾルバやセンサレス駆動ブラシレスモーターの開発を行っております。

電子機器事業における磁気応用製品及びディスプレイ関連製品については、材料技術、要素技術及び製品技術の研究開発を行っております。磁気応用製品としては、各種モーター用希土類ボンドマグネット及びインバーター用トランス等が、ディスプレイ関連製品としては、モバイル液晶用LED(Light Emitting Diode)バックライトユニット、カーナビ用中型液晶用LEDバックライトユニット、液晶TV用冷陰極管インバーター回路、プロジェクター用超高圧水銀ランプ点灯回路及びプロジェクター用光学ユニット部品等がそれぞれあげられます。研究開発を通じて確立された材料技術、要素技術及び製品技術を組み合わせることで、プロジェクター用光学部品である高性能カラーホイールを開発し、2006年年初に製品化しました。

また、当社グループの特徴でもある超精密加工技術、金型技術及び精密樹脂成形技術に加え、CAD/CAE設計技術、光学設計技術、薄膜形成技術及びフォトリソグラフィ技術等を組み合わせ、次世代モバイル液晶用バックライトユニット、中・大型液晶用バックライトユニット、プロジェクター用光学部品、LEDモジュール等FPD(Flat Panel Display)用光学部品の製品開発を進めています。さらに、アナログ回路技術や熱設計技術を組み合わせることで、液晶TV用次世代冷陰極管インバーターやキセノンランプ用インバーター、次世代超高圧水銀ランプ点灯回路等の製品開発も行っております。

当事業にかかる研究開発費は7,008百万円です。

来期(2007年3月期)の業績の見通し

来期は国内外で堅調な景気が続くと思込まれる一方で、一層の原油及び原材料の価格上昇、円やアジア通貨の変動、国内外での金利引き上げ、国内外での競争激化などが懸念材料としてあります。また、電子部品業界では調整色が見られる分野もあります。しかし、今後も情報通信機器やデジタル家電などの市場の広がりは続くと思われ、自動車や航空機産業も需要の拡大が続くと期待されます。そのような事業環境のもと、当社では、成長事業では積極的な投資と基盤強化施策を実施し着実な事業拡大を実現できる体制を整備する一方で、課題事業においては収益改善を最優先事項として改善施策に取り組みます。以上の状況を踏まえて、当期末現在における来期の業績は、売上高が310,000百万円に微減(当期比)、営業利益が25,000百万円に増加、当期純利益が10,000百万円に増加と思っています。

事業等のリスク

当社グループの経営成績及び財政状態等に影響を及ぼす可能性のあるリスクを以下のように考えております。なお、文中の将来に関するリスクは、有価証券報告書提出日(2006年6月29日)現在において当社グループが判断したものであります。

(1)市場環境

PC及び周辺機器、情報通信機器、家電を中心とする当社製品の主要市場は、国内外において競争が非常に激しく、需要が大きく変動するため、経営成績及び財政状態等に悪影響を及ぼす可能性があります。

(2)為替変動

当社グループの海外売上高比率は高いため、為替相場の変動によるリスクがあります。このため為替予約を中心とするリスクヘッジ取引を行っておりますが、長期的には為替変動により経営成績及び財政状態等に悪影響を及ぼす可能性があります。

(3)研究開発

新規製品・高品質製品を市場に継続的に投入する必要があるため研究開発を行っておりますが、研究開発の成果は不確実なものであり、多額の支出を行ったとしても必ずしも成果に結び付かないというリスクがあります。

(4)重要な訴訟等について

国内及び海外事業に関連する訴訟等の対象となるリスクについては、法務部門が一括して管理しております。将来、重要な訴訟等が提起された場合には、当社グループの経営成績及び財政状態等に重要な悪影響を及ぼす可能性があります。

(5)価格交渉

海外製の低価格製品との価格競争は大変厳しいものとなっており、低品質、低価格のニーズを持つ市場では市場シェアを維持・拡大できない可能性があります。

(6)原材料費・物流費等のコスト

外部からさまざまな原材料等の調達を行っており、在庫量の最適化、安定供給と安定価格の継続をはかっておりますが、原材料等の価格上昇が経営成績及び財政状態等に悪影響を及ぼす可能性があります。

(7)海外進出に潜在するリスク

当社グループの生産の多くは、タイ、中国、シンガポール等海外で行われております。海外進出後、長期間が経過し、地場との融合が行われておりますが、予期しない法律又は規制の変更、人材の採用と確保の難しさ、テロ・戦争及びその他の要因による社会的混乱といったリスクが内在しております。